

聖女の姉ですが、
宰相閣下は無能な妹より
私がお好きなようですよ? ②

渡邊香梨
Karin Watanabe

Regina
BUNKO

登場人物紹介

character

レイナ (十河 怜菜)

異世界に「聖女の姉」として召喚された。今はエドヴァルドの邸宅で居候をしている。明晰な頭脳を持つが、妹へのコンプレックスがある。独占欲を前に出したエドヴァルドには押されがち。

エドヴァルド・イデオ

アンジエス国の宰相。冷徹な性格だが、レイナを召喚したことに罪悪感を抱えている。また、レイナのことを知っていくにつれて、独占欲を次第に隠さなくなってきた。

フィルバート・アンジエス

アンジエス国の国王。エドヴァルドとは、気心知れた仲だが、その内面には、仄暗いものを隠し持っている。

イリナ・ハルヴァアラ

現・ハルヴァアラ伯爵代理の、気弱な夫人。

マナ (十河 舞菜)

レイナの妹で、異世界に召喚された「聖女」。必要以上に前向きで視野が狭い。レイナを「なんでもしてくる姉」と思っている。

ファルコ

公爵家お抱えの諜報兼、護衛組織のトップ。レイナとはある依頼で主従関係。

ミカ・ハルヴァアラ

イリナの息子で、無邪気に見えるが聡明。

目次

聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より
私がお好きなようですよ？ 2

書き下ろし番外編

だから「彼」は雨を厭いとう

聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より
私がお好きなようですよ？ 2

プロローグ 見知らぬ夜空を見上げて

湯船に浸かり、身体を温めて、ベッドに潜り込んだはずだった。

「……眠れない」

どのくらい時間が経ったのか分からないまま、結局私は再び起き上がって、サイドテーブルにあった飲みかけのノンアルコールサングリアを片手にベランダに出た。

ほんのひと月半ほど前までは、日本の学歴社会においての頂点に君臨していると、言っても過言じゃない大学に、意気揚々と通っていたのに。

家族を振り切り、妹を振り切り、誰に煩わされることもない未来は薔薇色のはずだった。

それが、何故。

飲み物を片手に、見知った星座が一つもない夜空を見上げているのだろう。

一人暮らしをしていた時とは似ても似つかない広さのベランダに、アイアンチェア二

脚と丸型のアイアンテーブルが置かれている。私は日本とは比べ物にならないほど星の多い空を苦々しく見つめた。

目の高さに掲げたグラスの中身を飲んだところで、ぶどうジュースにフルーツの浮かんだそれでは、酔って見た夢と思うことも出来ない。

「異世界で何してんだろ、私……」

——答えは返らない。

正確には、どうやって、は分からなくとも「何故」は分かる。

やってくれたのは、双子の妹・舞菜だ。

『たった二人の、血を分けた双子の姉妹だもん！ マナを助けてくれるよね!』

異世界に呼ばれ「聖女」としてちやほやされるといふ都合の良い部分だけを享受し、そうあるための努力は最初からするつもりもなかった妹が「足りない部分は姉が補う」などと、相手に気軽に吹き込んだ結果——私は異世界に召喚されたのだ。

六年越しの家庭内叛乱を成功させて、誰にも後ろ指を指されない一流大学に入学を決めて地元を離れ、卒業後は自由になった自分の人生を謳歌するはずだった。そんな私の未来設計を、妹はたったの一ヶ月で叩き壊した。

ある日いきなり図書室で腕を掴まれ、気付いた時には私は中世ヨーロッパ仕様な宮殿

の中に立たされていったのだ。

アンジエス国——登場人物も設定も、何もかもが乙女ゲームであり戦略シミュレーションゲームでもあった。〃蘇芳戦記〃と酷似した世界。

この世界では各国を繋いでいる〃転移扉〃を維持出来る魔力を持つ者は〃ゲートキーパーの守護者〃と呼ばれる。

鉄道も飛行機も存在しない、馬車移動が主体の世界で〃転移扉〃の存在は非常に重要だ。それ故、それを維持するだけの魔力を持つ者は、国から王族にも匹敵するほどの手厚い保護を受けている。

そして、〃ゲートキーパーの守護者〃が男性であれば「聖者」と呼ばれ、女性であれば「聖女」と呼ばれている。世間一般にイメージされる祈りで浄化作業を行うような聖女像とは趣を異にしているのがこのゲーム世界だった。

多分妹は今でも充分には「聖女」の役割を理解していないだろう。

その結果、私を召喚するなどという強硬手段に出たのだから。

私が求められた役割は妹の補佐。私には魔力なんてものは欠片も存在しなかったにもかかわらず、だ。魔力があらうと、それ以外何もしない「聖女」に、召喚した側が早々に不都合を覚えたのだろう。

だからと言って、片道切符の強制招待はいただけなかった。

挙句、日本に戻る術もないと知れば尚更に、妹に縛り付けられたままの生活などごめんだと、そう思って、王宮さえも早々に出ていくつもりではいたのだけれど。

ぶっちゃけ住所不定無職の状態で未知の世界へ飛び出していくほど、お花畑脳にはなれなかった。

だから数多の不満と不安はいったん全て呑み込んで、アンジエス国宰相であり、大学の図書室から私を引きずり込んだ当事者であるエドヴァルド・イデオン公爵の邸宅で、私は自活の目処が立つまで厄介になることを許容したのだ。

あくまで、それは王宮で妹と暮らすことを避けるための、せめてもの代案としてだった。そうなるも嫌でも、ゲーム上の今後を考えざるを得ない。

今の自分が暮らすのは、アンジエス国イデオン公爵邸。

となると、私が歩んでいるのは間違いない。〃エドヴァルドルート〃だろう。

もともとアンジエス国パートのシナリオは恋愛が少なく、戦略シミュレーションゲームとしての趣が強い。

それ故美形キャラとの恋愛を楽しみたい女子の多くは、より恋愛要素の強い別の国——ギーレンカバリエンダールからスタートしてははずだ。

アンジエス国で展開していく物語は、隣国であるギーレンからの侵略、あるいは「扉の守護者」の略奪を阻止することがメインになっている。

だからバッドエンドは必然的に国の滅亡による上層部の処刑、あるいは宰相の暗殺によって国が滅亡するフラグが立つというシナリオになっている。

では今の私は、ゲームの時系列で言うところのどこに立っているのだろう。イデオン公爵邸に招かれて最初に確認したのはそのことだった。

エドヴァルドルートとバッドエンドは二種類ある。

その分岐点になる事件のうち、隣国ギーレンでの第一王子による婚約破棄事件は既に発生していた。

そのため、機密情報である「転移扉」の情報流出事件から派生するエドヴァルドの処刑エンドのシナリオは消滅していると判断出来た。

けれど第一王子が王位継承権を失うことで、次期王太子として外遊に出ることになる第二王子エドベリが、滞在先であるアンジエス国の王宮で暗殺される可能性は残されている。

もしこのルートのまま進行すると、アンジエス国王の叔父レイフ殿下と、ギーレンでの復権を目論む元第一王子による二国同時の叛乱が勃発してしまう可能性がある。

そうなると、エドヴァルドが国を追われる途中で殺害されるバッドエンドに辿り着いてしまうかもしれないのだ。

エドヴァルドを失ってしまったえば、聖女と共に王宮に縛り付けられるか、彼女とセットでレイフ殿下派閥のどこそぞの有力貴族に囲い込まれかねない。

悪くすれば魔力なしの「聖女の姉」には価値もないとばかりに暗殺者を差し向けられるかもしれない。

いずれにせよ国王陛下が私の保護と教育をエドヴァルドに委ねた時点で、私の命運はエドヴァルドと共に動こうとしていたのだ。

とはいえ、今のままではシナリオを知ったところで舞臺は確実に何もしないだろう。なんとしても、私がエドヴァルドの死のシナリオを回避しなくてはならないのだ。

最初はもちろん私自身が死にたくないというところから始まった。けれど彼の邸宅で過ごすうちに、エドヴァルドも死なせたくないという気持ちが強くなっていった。

彼の処刑エンドが回避されたとして、ならばもう一つのバッドエンドである亡命・暗殺エンド阻止のため、これから私に何が出来るのか。

元いた世界に帰る術が見つからない以上は、今はそれを最優先に考える必要があった。なのに。

（――帰さない）

「……っ！」

かつて、彼にそう囁かれたベランダに佇んでいたのがいけなかったのか、エドヴァルドに囁かれた言葉が脳裡にこだましてしまい、わちゃわちゃと両手を振ってしまう。

だいたい、そんなシナリオもスチルもゲームの中にはなかったのだ。

なかったはずなのに、実際には反則きみなバリトン声と共に、重なった唇の記憶までが蘇ろうとしていて――

「――レイナ」

「びゃっ!?」

まさか脳内こだまと現実とが一致すると思わず、うっかりおかしな声を上げてしまった。

気付けばベランダの向こうに立ったエドヴァルドが、ラフな格好でじつとこちらに視線を向けている。

「エ、エドヴァルド様……」

「眠れないのか」

「えっと……」

はいと答えても、違うと答えても、自分が不利になることが確定していそうで言葉に詰まる。

「いよいよアルノシウト伯爵夫妻が来ると思えば、ちょっと眠れなくて……」

困った私は、眠れないほどの悩みではなかったけれど、嘘ではないことを口にした。事実、現国王の叔父であるレイフ殿下は虎視眈々と叛乱の機会を窺っている。明日やってくるアルノシウト伯爵夫妻はそんなレイフ殿下に抱き込まれて、彼に資金の提供を行っているようだ。

つまり、この国にいずれ起きる叛乱クーデターを防ぎ、エドヴァルドの命を救うためには、彼らをやりこめる必要がある。

アルノシウト領は無理な鉱山開発によって、鉱毒を垂れ流しているという話も出たからには、彼らを罰する重要性はさらに高まっているのだけれど……

「あ、案外難しいですね。アルノシウト伯爵だけをやりこめて、領内の産業の価値は下げすぎず、経済的な体力をつけさせるっていうのは――」

「――レイナ」

「……はい」

エドヴァルドに名前を呼ばれ、あえなく言葉を区切る。

「どうやら悩んでいたのはそこじゃない、というのはバレバレだったようだ。」
 「一人でアルノシユト伯の瑕疵かしを問おうとしなくていい。そもそもこの問題は、一朝一夕でどうにかなるものではない。この件で貴女を王宮の聖女のところに戻すような真似は誓ってしない。……だから」

そこで少しだけ、間が空いた。

夜空に同化しそうな群青の瞳が、こちらを射貫く。

「公爵くわく邸ていにいてくれ。私は決して召喚をした罪悪感で貴女を望んでいる訳ではないんだ。覚えておいてくれ。明日、いや、これからも、私は貴女のすぐ傍そばにいるのだということ」

夜が明ければ、アルノシユト伯爵夫妻がいよいよ領地の報告にやってくる。昨日、私一人で対峙したのとは違い、エドヴァルドが隣に立つ。

彼らが難敵だというのはよく分かっている。貴族社会に慣れた彼らはのらりくらりとこちらの言葉をかすわす術すべを知っているのだ。

そんな彼らと相対する不安があった。だから嘘はついていない。けれど本当に不安だったのは、そのことじゃなかった。

この邸宅の居心地の良さと、私を選び、傍そばにいと云って憚はばらないエドヴァルドの言葉ことばを信じていいのかという疑念。

そして舞い葉もうじゃなく「怜わた菜たし」だけを見てくれる人間などどうせいないのだからと、一人で異世界を生き抜く術すべを模索していた、その計画と決意が揺らぐことへの恐怖だ。

私の心にそんな波紋を広げた張本人に向かって、不安定な己の内心を吐露する気には、今はなれなかった。

「もしまだ眠れないと言いうのなら、このベランダをまた乗り越えて、添そい寝ねに行くが」
 「……っ!?」

隣室のベランダに立ち、こちらを見つめるエドヴァルドの瞳の奥にわずかな本気の色を垣間見て、私は思わずブンブンと首を横に振った。

「寝ます、寝ます！」

「そうか……残念だな」

面白そうに笑わないでください、宰相閣下！

ゲーム設定の「冷徹鉄壁キャラ」はどこにいったんですか——!?

第一章 視覚の暴力に立ち向かえ

その翌日。昨晚のやりとりなどなかったように、私たちは互いに声をかけあい、支度をしてアルノシウト伯爵夫妻を迎え撃ちに玄関へと向かった。

個性の強い貴族の奥様と聞いて、勝手にポンパドゥール夫人のような姿を想像していた私に、知識不足な面があったことは否めない。

けれど、アルノシウト伯爵夫人は、そんな私の想像の斜め上をいく奥様だった。

ポンパドゥール夫人は「侯爵夫人」だとか、国王陛下フィリップ・バートにはルイ十五世のような公妾めかけがないとか、そういうことでもなく——単に、視覚として。

「……ナ、レイナ。気持ちに分かるが、そこで固まらないでくれ」

階段を下りる寸前、エドヴァルドからそう囁かれて、ようやく我に返る。

「……エドヴァルド様」

「ああ」

「ドレス、ヘルマンさんをお願いしていただいて、本当に、本っ当に、よかったです」

「……そうか」

本当に、を強調する私にエドヴァルドが苦笑している。

恐らく、階下にいた伯爵夫人からもそんなエドヴァルドの苦笑する姿が見えたのだろう。

まあ……と、声が洩れ出ているのが聞こえた。

鉄壁無表情がデフォルトの宰相閣下が自分から私の方へと顔を寄せた上に、私の答えに微笑わらって言葉を返すその姿は、もはやバカツプルのイチヤイチャだったと気付いたのは後になってからだった。さらには侍女さんたちがイイ笑顔で親指立てていたのにも、気付けなかった。

要はそのくらいの衝撃が、私の頭の中を駆け巡ってました。はい。

——トカゲとロリータ。

視界が一瞬、認識を拒否した。

伯爵夫人、確か私の倍のご年齢でしたよね？

トゥーラ・オルセン侯爵令嬢の姫系ドレスも大概でしたけど、さらにピンクとリボンとレースに拍車がかかって、ヘッドドレスまでついての、ロリータ衣装ですか!?

夫人単体で言えば、似合っていない訳ではない。

彼女は割と柔らかい印象の女性で、ヤンキー少女との友情物語の映画で「ロリータちゃん」だった女優さんのイメージが、無きにしもあらずだ。

ただ、そんな彼女が、無表情かつ爬虫類っぽい顔つきのアルノシウト伯爵の隣に立つた瞬間に、それはもう、ただただ、視覚の暴力になってしまったというだけの話。

頼んだ「マダム・カルロツテ」の衣装は、本当に大丈夫だろうかと不安になってしまふ。とはいえ、今から戦う本命は、トカゲ伯爵アルシユトの方なので、慌てて彼女から視線を引きはがして微笑みを作る。

エドヴァルドも同様に酷薄ともいえる笑みを浮かべて、二人を見下ろした。

「伯爵も夫人も、息災なようで何よりだ。報告書は昨夜彼女より預かっている。話は団欒ホワイエの間でさせてもらおう」

エドヴァルドに玄関ホールで雑談をするつもりは欠片もないらしい。

宰相閣下の鉄壁無表情を分けてほしいと、切実に思った。

さあ、そのまま団欒ホワイエの間へ——、と身体を動かそうとした時だった。

「まあ公爵様、お隣の美しいお嬢様を私わたくしにご紹介くださいませんの？」

「……っ！」

甘ったるい伯爵夫人の声がかげられる。その声を聞いた瞬間、小さく息を呑み込んで、

エドヴァルドに添えていた手に力を入れてしまふ。

そんな動作に気が付いたのだろう。

「下りるぞ」

私を気遣うような小さなエドヴァルドの囁きに、私はなんとか内心を立て直そうと、コクリと頷いた。

それでもざわついた心は収まっていない。

鼻にかかったような甘ったるい話し方に、嫌悪感が先立つのはもはや条件反射だ。衣装の傾向もそうだけど、色々な意味で、きつと舞菜が二十年たつたらあなる。

あざとさは無意識。呼吸と同じレベルで異性の庇護欲を刺激する姿に既視感しかなかった。

頑張れ私、と自分自身に言い聞かせる。

大丈夫。

アレは舞菜じゃない。

何よりここで怯ひるんでは、公爵家の皆さんの期待に背そむいてしまふ。

小さく深呼吸をして、エドヴァルドと共に歩を進める。

「……伯爵から話はあったと思うが」

すると途中の踊り場まで階段を下りたところで、エドヴァルドが一度足を止めて口を開いた。

「彼女が当代『扉の守護者』の姉、レイナ・ソガワ嬢だ。国が妹の補佐にと請うた賓客であり、陛下からの命で滞在してもらったが……あまりに優秀なので、私がこの邸宅の内向きことも担ってもらいたいと、二階の私の隣の部屋への滞在を、切にお願いした」
 そう言って口元を綻ばせたエドヴァルドの姿に、誰もが驚いて口を挟めずにいる。

「ああ、もちろん夫人の仰る通り、この美しさも理由の一端ではあるな」
 いやあっ!?

目の前で、しれっと歯が浮くようなことを言ってる人って誰ですか!?

ホントに、女除け必要でした!?

自分でなんとでも出来たんじゃ……!

内心嵐どころか暴風雨に変じたところに、バツチリとアルノシュト伯爵夫人と視線が合ってしまった、我に返った。

ダメだダメだ。ヨシ直伝の『深窓の令嬢のご挨拶』を、ここで披露しないでいつするって話。

一度、エドヴァルドと視線を絡ませて、許可を得た体をとってから、ドレスの両端を

軽くつまむ。

「初めまして、アルノシュト伯爵夫人。レイナ・ソガワと申します。妹の補佐にと請われこちらの国へと参りました。ですが国の保護下にある妹と異なり、寄る辺なく不安にしておりますところ、エドヴァルド様が手を差し伸べてくださいます……現在では大変に、良くしていただいております」

エドヴァルドの微かな動揺が、再び組んだ腕越しに伝わる。
 なんですか。嘘は言っていないですよ？ 物は言いようです。

ちらりと視線を向けると私の言わんとしたことを察したのか、一瞬の動揺すらなかったものとしたエドヴァルドが、アルノシュト伯爵夫人が何かを言いかけるよりも先に私の言葉を継いだ。

「……無理を言っ来てもらったのだから、当然だ。だが今となっては陛下の命などなくとも、私はこの邸宅で貴女を守るつもりだ。もはや義務ではない。そのことを皆に周知させるべく、貴女には二階への滞在を願っている」

そう言って前を向いたエドヴァルドは、それ以上は誰の言葉を持つこともなく、私の腕を引いて残りの階段を下り始めた。

伯爵夫人が目丸くしているところから言っても、その場しのぎの嘘を言っているよ

うには見えないのだろう。

「公爵様……本当に今年は、縁談はご不要ですかしら？」

階段を下りきつたエドヴァルドは、そのまま歩いていたものの、そんな夫人の声に一度だけ足を止める。

「そもそも毎年必要としていないが。それでも、私がいかに彼女を大切に思っているか理解いただけただようなら、以降は他をあたつてもらいたい」

そう冷やかに言い置いてからこちらへと向けられた微笑みに、冷徹宰相との乖離が半端ないと、私は思わず息を呑んだ。

果たしてこれほどのキラキラなスチルが「蘇芳戦記」の中にあつただろうか。

さすがのアルノシュト伯爵夫人も、それ以上何も言えなくなつてしまつたようだ。

多分、この手の人は容易に引かないとは思うけど、初戦は取つたつてことで……いいんだよな？

トカゲ伯爵様が、色々と諦めた表情なのはなんとも言えないけど……

それつて、誰の、何を、諦めたの？ ねえ？

団欒ホワイエの間に着くと、エドヴァルドは書類片手にあくまでさりげなく、話の口火を切つた。

「さて、あまり事細かに領の運営に口を出すつもりはないが……昨日レイナ嬢から話を受け取つた範囲だと、特に他領の商會に銀の先買権を譲渡したのは気になるな。何故自領の商會にしなかつた？ 他領に先買権を譲るほど困窮しているのならこちらも対処に動くが」

「……っ」

エドヴァルドが突いたのは、アルノシュト伯爵家がレイフ殿下に与して国への叛逆に加担するのではないかと疑惑についてだ。

もちろんあからさまにそんなことは言っていない。ただの仄めかしだ。

そんなエドヴァルドの言葉にアルノシュト伯爵は一瞬だけ表情を揺らがせ、それからすぐに彼は立ち直つた。

このあたり、狼狽を隠せていなかったオルセン侯爵とは器の違いを感じる。

「申し訳ございません。妻の実家絡みでしたもので、他領という印象が薄かつたのでございます。それに、近いうちに坑道の掘削を少し奥まで進めたく、鉱山労働者の環境を整える必要もありましたので、配給する食料や薬が例年より多く必要だつたのです」

鉱山での労働自体、ハードな肉体労働であると同時に、坑内での石の粉や煙を遠因とした呼吸器疾患の危険性を、常に抱えている。

一人一人が長時間労働にならないようにするため、当然作業は交代制だ。さらにそれに、交代待機の間の補償も必要となる。

それを食料や薬の配給で賄^{まか}っているのであれば、確かに一定の備蓄は必要だろう。「備蓄が増えているのは、そのせいと言う訳だな」

エドヴァルドも、そこは納得したように頷いている。

その頷きに、アルノシュト伯爵は少しホッとしているように見えた。

「掘り進めた坑道が安定しましたら、次年度は先買権を譲渡するようなこともないかと存じます」

これ以上エドヴァルドに詮索をされないためには、当面先買させる銀の量を、理由なしに増やす訳にはいかない。これで「来年はそれほど資金提供が出来ない」という一言が、アルノシュト伯爵側からレイフ殿下側に、裏で流れるだろう。

叛乱には金銭も、物資も大量に必要だ。多少なりと彼らへの牽制にはなるはずだ。

——今出来るのは、ここまでじゃないかと思う。

そんな私の視線を受けて、エドヴァルドが諦めたように短く息をついた。

「いいだろう、承知した。アルノシュトからの情報は気にかけておくようにするから、問題が生じるようなら、すぐさま使者を立てろ。坑道を掘り進めるとなると、落盤事故

や掘削で出る屑石の処理などでも、対処に困ることが出てくる可能性もあるからな」

「は……ご配慮誠に有難く……」

恐らくは去年まで言われなかったことを言われたであろう、アルノシュト伯爵の目が泳いでいる。

爬虫類^{トカゲ}顔で目がせわしなく動いているのは、ちょっと、いや、かなり不気味。

多分、と言うか間違はなく、現段階で既に、夫人の故郷でありレイフ殿下の直轄領であるブラード領の商会が手配した労働者が銀山に流入して、周辺の村で起きている事故報告などを握り潰している。残念ながらもまだ、証拠はないのだけけれど。

この場では、次はないと仄^ほめかせておくぐらいのことがせいぜいだろう。

「去年までも、気にかけているつもりではあったが、鉱山に関しては、私よりも彼女の方が余程詳しかった。私も色々と学ばされた。伯爵も、何かあれば彼女にまず意見を聞いた方がいいかもしれないと思っただけだ」

……エドヴァルドの言葉であちこち動いていたアルノシュト伯爵の目が、一瞬で私の方に寄ったのは、さらに不気味。

とりあえず、困った時の扇頼みで、口元を覆いながら、ニッコリと微笑んでおく。ホント、コレ便利だわあ。

最初は使い慣れなくて四苦八苦しただけど、だいたい使い方が分かってきた。「あまりハードルを上げないでくださいませ、エドヴァルド様。私は、目をかけていただいているお札にと、元いた国で学んだ知識をお渡ししているだけですから」

「その謙虚さこそが、私がありますます貴女を手放せなくなる理由でもあるのだがな」

「まあ」

扇の後ろで痙攣^{ひきき}った笑いを浮かべつつ、視線を下に向ける。

うん、まあ……長年、家族に対してやってきたことだから、小芝居は得意なんだけど。なんだろう、そこに宰相閣下^{ネロツクノド}が加わることで、演目がとんでもなくグレイドアップしている気がする。だけど仮にエドヴァルドのアンジェス追放フラグを叩き折ったとして、今年はいいにしても、来年も再来年もエドヴァルドは同じ小芝居で見合い攻撃をぶった切るつもりなんだろうか。

とりあえず、今この場を凌げればそれでいいということか。

実際アルノシュト伯爵はそんな小芝居に踊らされてくれたようで、ハンカチで汗を拭って首を横に振っている。

「確かに……昨日少し話をさせていただけだけでも、色々と内政にお詳しくいらっしやって、私も驚きを隠せませんでした。随分優秀でいらっしやる」

どうやらアルノシュト伯爵は、仄^ほめかされている領地への疑念を全力で無視して、当たり障りのない会話をすることに決めたみたいだったけれど、そこで話を明後日の方向に思い切りねじ曲げたのが、お隣の、ロリータ衣装^{フリッシュ}、奥様だった。

「でも、それほど優秀で公爵様の執務を手伝われるようなお嬢様でしたら、社交方面で後々、お困りになられるのでは、ございませんこと?」

こてりと首を倒して、愛らしく聞いてくる姿に思わず遠い目になる。

夫への追及をかわすために出た言葉と取れなくもないけれど、後で聞いたところによると、アルノシュト伯爵夫人カロリーヌの空気の読まなさっぷりは毎度のこと、こうして夫である伯爵の話をぶちぎってしまったのもしょっちゅうらしい。

ふわふわと袖のレースを揺らしながら、夫人は私たちの沈黙をもととせず言葉が続ける。

「公爵様ほどのお方であれば、もうお一方社交に長けた方をお傍に置かれても宜しいのでは? こちら、皆さま名家のお嬢様方ですから、複数の妻を持つことにも、理解のある方たちばかりでしょ?」

「善意」全開といった表情で夫人はエドヴァルドに視線を向けているし、いつの間やら定例の報告書類以外の、まるで身上書のような書類が重ねて並べられている。

この話の聞かなさど、あくまで善意に見せかけるのが舞臺をつくりだ、と思っていると、エドヴァルドが微笑んで(いや、目は笑っていない気がする)、夫人の言葉を一刀両断した。「必要ない。最初から略結婚と理解して正室を迎えるなら、それぞれのメリットに応じて公妾として二人三人とさらに迎える選択肢もあったかもしれないが、己の『唯一』を見つけてしまった以上、そんな選択肢はもはや意味を為さない。少なくとも彼女に、そのように手当たり次第な不実な男と思われるのは許容出来ない」

いやいや！

一見イイコト言ってますけど、前半はなかなか鬼畜ですよ、宰相閣下。

そこに愛はあるのか——なんてCMがあつた気もするけど、まさにそれ。

思わず顔が痙攣した私に、エドヴァルドが「ご覧の通り」と、苦笑を見せる。

「彼女が側室の存在を厭つている以上、私は彼女を尊重する。まあ、もともと許しがあつたところで側室を迎えようとも思わないが」

私の表情まで使つた反駁は見事の一言に尽きるのだけれど、さすが婚活のラスボスは一筋縄ではいかなかった。

夫人がぐるりとこちらに微笑みを向ける。

「レイナ嬢？ レイナ嬢も、公爵様にはご実家の後ろ盾があつて、社交界から夫を支え

られるご令嬢がどなたかいらつしやつた方がお心強いですわよね？ こちらの国に來られたばかりでは、心細い面も多くおありでしょう？」

一見すると、裏表なく「エドヴァルドのため」「私のため」を会話に滲ませながらの「善意の提案」だ。

多分、本人は心の底からそう思っているのだろうし、相手の望まぬことを押し付けている自覚もない。

だけどこれは、「貴女のためなのよ」と言いながら、望まぬ進路や縁談を押し付けてくる毒親のやりようとなんら変わらない。

夫人は、言われた側の意見は求めておらず、感謝して受け入れられることが当然と思つている。

エドヴァルドが視線どころか全身で「拒否しろ」と私に訴えていることなど、夫人の視界からは都合よく消されているのだ。

部屋の空気、温度が冷え込んできていることは気のせいじゃないと思うんだけど。夫人は笑顔で無視だ。

ええ、はい、分かっていますってば、宰相閣下。

その前半の鬼畜な発言部分は、ちゃんと聞かなかつたこととしておきますから。

とりあえず何かフォローしろってコトですよね？
ちゃんと仕事しますよ？ ——主に扇が。

「伯爵夫人、お心遣いは大変に有難いのですけれど……私は心が狭うございますので、この国の社交界に伝手が無い心細さよりも、エドヴァルド様の目が私以外の方向に向く方が耐えられませんか。何よりこの国に来る時に、エドヴァルド様は私のことを必ずお守りくださると、お約束いただきました。それは、他の女性と並列に扱われることではないと思っておりますの」

……とはいえ、何事にも限度、限界はあるワケで。

これ以上齒の浮くようなことは、もう私には言えません。

ですがレイナ嬢——と、なおも夫人が言い募りかけたところで、私は扇越しにニッコリと笑って、それを遮ることにした。

扇の力を借りても、ここが限界です、宰相閣下！ 何とぞご理解を……！！

もうエドヴァルドに丸投げしようと思ったその時、何気なく、本当に何気なく、机に広げられていた釣書の山に視線がいった。

……………あれ？

浮かんだ疑問を解消するため、なんとか最後の気力を振り絞って私は扇越しに視線を

夫人の方へと向けた。

「アルノシユト伯爵夫人」

「——どうかなさいまして？」

不満そうな素振りは見せずに微笑み返すところは、夫人もさすがだと思ふ。
うん。

気合再び、頑張れ私。

トカゲとロリータちゃんの衝撃に、あとちよっと耐えろ。

「夫人がお持ちになられた釣書ですけれど——」

「ええ、皆さま素晴らしい方ばかりですってよ？」

私の言葉に喰い込みぎみに夫人が答えるものだから、一瞬エドヴァルドの目が据わった。

いやいや話は最後まで聞きましょう、お二人とも？ 私はここから誰を選ぶとも言つてませんよ？

それよりも、聞きたいことが出来ただけです。

私は誰の目にも分かるように、視線だけを机の上へと落とした。

「シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢……でしたかしら？ この方はいつ、ギーレン国

「からこちらにお越しになられたんですの？」

「……………え？」

私の一見無邪気な質問に、夫人の表情から笑顔が抜け落ちた。

見ればトカゲ伯爵様も、幽霊を見ているような表情になっている。

失礼な。

それにしても、驚くほどに反応が顕著だ。

もう一押しするべく、今度は扇の後ろで首を傾げて、釣書一枚を指さして見せる。

「確か、ギーレン国のベクレル伯爵家所縁の方ですわよね？」

「そ……………それは……………」

「先ほど、こちらの方々のご実家の後ろ盾があり、社交界から夫を支えられる令嬢、とのお話でしたけど——」

私がそこまで言いかけたところで、青ざめた表情のアルノシウト伯爵が、テーブルの上にあったご令嬢方の釣書を慌ててかき集めて、夫人の手の中に押し戻した。

「さ、もういいだろう、カロリーヌ」

「旦那様、ですが……………」

「さすが公爵様がお選びになられたご令嬢。我々では齒も立たない——そういうことだ。

申し訳ありません、公爵様。この釣書は忘れてください」

「……………もとより興味もなかったものだ。残らず持ち帰ってもらって構わない」

視線はアルノシウト伯爵の方を向いてはいても、エドヴァルドを纏う空気が完全に「後で説明しろ」と、私に突き刺さっている。

ひいっ!? しかも冷気が増してるし！

だって、さつき釣書を夫人がわざとらしく何枚か開けて、机に置いたところで気が付いたんだから、事前に説明出来なくて仕方がないと思うの！

それからすぐに這々の体で公爵邸を後にするアルノシウト伯爵夫妻を見送る。

「つ……………疲れた……………視覚の暴力だと思う、あれ……………」

気が抜けて玄関ホールに崩れ落ちかけたけれど、私の右腕を掴んだエドヴァルドがころうじてそれを阻止してくれた。

レイナ様素晴らしゅうございました！ とか、こんなに短時間で話が済んだのは初めてです！ とか、音が出ないように拍手してみせる使用人一同を横目に、エドヴァルドの表情は厳しかった。

「助かった、と言いたいところだが手放しでは喜べないのも確かだ。言いたいことは分かるな」

「あー……そうですね、ハイ」

「セルヴァン、団欒ホワイエの間の書類をまとめ直して書斎へ。私はレイナと先に話を始めている」

「かしこまりました、旦那様」

無言でこちらを見てくるエドヴァルドに、危険を察知した私は慌てて立ち上がった。

「ええ、大丈夫です！ 歩けます！ 一人で書斎まで行けます！」

「……………」

かろうじてお姫様抱っこは回避出来たものの、私の右腕を掴んでいた力は、緩まない。今日も今日とて、私は書斎に連行されることになった。

「蘇る「ソファドン」の記憶に身を強張こわばらせると、私の腕を放したエドヴァルドがため息をついた。

「……この格好で余計なことはしないから、普通に座っている」

確かに今着ている服は、お互いに、気楽な室内用の服ではない。

あんなことをしては、皺が寄って公の場に出られなくなる。

それもそうだと納得して、私は書斎の応接用ソファ、エドヴァルドの向かいに腰を下ろした。

「それで？ シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢、だったか。その名前で何故、アルノ

シュト伯爵夫妻があんなにも顔色を変えた。正直あれがなければ、まだまだ居座られるところだっただろう」

片手をソファの背もたれに置き、足を組んでじっとこちらを見てくるエドヴァルドに、私も慌てて両手を横に振る。

「いや、隠していた訳じゃないんです！ あの釣書が机の上に広げられて、名前と絵姿を見たからこそ、思い出したと言うか……」

「何を」

「そのご令嬢、ギーレン国でパトリック元第一王子に最初に婚約破棄をされたシャルリーヌ・ベクレル伯爵令嬢と同一人物のはずです」

「……………」

私の爆弾発言に、さすがのエドヴァルドも、小さく息を呑んだ。

シャルリーヌ・ベクレル伯爵令嬢。

今は、シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢か。

彼女こそ、蘇芳戦記をギーレン側から始めた場合の、正当なる主人公だ。

ゲームのシナリオでは、婚約破棄をされた後にエドベリ第二王子の攻略に入るか、修道院に追いやられるか……という流れになるはずだ。

エドベリ第二王子の攻略ルートに入る場合は、婚約破棄事件のほとぼりが冷めるまで、ヒロインは国外へ出る。ポードリエ伯爵家とベクレル伯爵家とは親戚関係にあったから、そこで養女となつてヒロインの家名が変わるのだ。

そしてエドベリ第二王子がアンジェスに外遊に来た際に二人は再会し、婚約破棄のショックに耐えながら、他国で健気に生きるシャルリーヌを見たエドベリ第二王子が彼女に求婚する――のがハビエンまでの流れだったはずだ。

ポードリエ伯爵家はアンジェス国ではレイフ殿下の派閥貴族だ。そのため、彼らによる叛乱騒ぎが起きることでアンジェスでも居場所を失いかけるシャルリーヌを、エドベリ第二王子がそのままにしておけなかったのだ、という理由付けもされていたはずだ。

「経緯は分かりませんか？ 婚約破棄をされてギーレン国内で居場所がなくなって、本人に瑕疵かじはないのに、修道院はあんまりだろうって、ポードリエ家に養女に出されたのかなあ……とかは、勝手な想像ですよ？ ただポードリエ伯爵家も、今のところはレイフ殿下派閥のほうですから、裏がないとは思えなくて。つい口を挟んじゃいました、すみません」

本当は「しれつと誰の釣書をまぜているんだ」と、言いたいくらいだった。

もっとも、あれだけ慌てふためいて退散したことを思えば、彼女との縁組を推し進めて、エドヴァルドをレイフ殿下の派閥に取り込みたいという意図は確かにあったんだろう。だけど実際にそれを実行されると現在主人公――シャルリーヌが進んでいるであろう

「エドベリルート」が破綻してしまいかねない。

一見シャルリーヌのルート選びは「エドヴァルドルート」と無関係のように思える。けれど、王子とヒロインがくつつかないとなれば、ヒロインを王子に紹介出来ず、エドベリ王子に売れる恩が一つ減ってしまう。

そうすると、エドヴァルドがギーレンに亡命せざるを得なくなった場合に頼る先が一つ減りかねない。私が一番避けたいのは、エドヴァルドの失脚と死だ。なのでそれを阻止するために口を挟ませてもらったのだ。

そしてアルノシウト伯爵は伯爵で、ポードストレーム商会との繋がりを知られ、レイフ殿下への資金提供の調達が封じ込められたも同然の状態になったために、縁組の利よりも、献金から叛乱の計画に辿り着かれるリスクを回避する方を選んだに違いない。

それを知らなかった夫人だけが、話題に取り残されたのだ。

つくづくトカゲ……ごほん、アルノシウト伯爵の危機回避能力の高さに舌打ちしたい気分だ。

出来れば主人公ヒロインサマには、アンジェス側のシナリオを引つ掻き回すことなく、ギーレ

ン側でハピエン王道ルートを幕進してもらいたい。

シナリオを外れそうな、危なそうなフラグは事前に叩き折る。
これ鉄則。

とはいえ説明をしてなお、それだけじゃないだろうとばかりに、じとつとした視線でこちらを見つめてくるエドヴァルドに対して、私は所在なさげに首を縮こまらせる。

「ええつと……シャルリーヌ嬢が実際にエドヴァルド様をどう思っているのかは、分かりませんよ？ ただレイフ殿下派閥の視点から考えれば、なんとしてもエドヴァルド様にフィルバート陛下からは離れてもらいたいでしょから——」

さすがに今の段階でギールン側の物語についてまで口にするつもりはないので、あくまでレイフ殿下側の視点で考えた場合のことだと仄めかせておく。

「馬鹿馬鹿しい」

するとレイフ殿下の名前を前に出したのが功を奏したのだろうか。

それとも私が自分の意図を隠したことに気が付かなかったのか、あるいはあえて触れなかったのか。

エドヴァルドは、私が口にした部分だけを掬い上げてそれを一刀両断した。

「まあしかし、あれほど慌てふためいて帰っていったのなら、その話もあながち穿ちす

ぎとはいえないんだろうな」

「……私が、エドヴァルド様の周りが物騒になるって言った話、分かっていただけです
か？」

究極の目的はアナタの亡命暗殺エンドの阻止です、だなんて今の時点で言えるはずもないけれど、とにかく真面目な声と表情でエドヴァルドを見つめれば、彼もそれ以上私を怪しむことはなかった。

「……既に兆しはある、か」

「何もかも、エドベリ第二王子の外遊と切り離せることじゃないので、公爵邸から可能な限りの助力はします。——絶対に宰相室には行きませんが」

邸宅にある執務室、ではなく宰相室、と言った意味はエドヴァルドに正しく伝わった
ようで、すぐに領さが返ってきた。

要は王宮に行きたくないのだ。

国として、聖者から聖女への「扉の守護者」の交代が布告された以上、他国からの賓客が訪れた際には、一度は挨拶を兼ねた顔合わせをおこなってはならない。それは聖女の姉として招かれた私にも当てはまり、公的な式典あるいは夜会に最低でも一度は顔を出さなくてはならないだろう。

無駄飯喰らいの居候扱いから脱却するため、助力をすること自体はやぶさかではない。ただそれでも、真に必要なまで、王宮に足を踏み入れるつもりは一切なかった。

他の何に協力してもいいけれど、それだけは譲れない。

舞菜はまだ、私がこの国の文字や歴史を一から学ぶのに、手いっぱいになっていると思っっているだろう。

私がこのアンジェス国で平穩無事に——舞菜と関わらずに過ごすためには、妹に「誰からも愛される自分と違い、姉は毎日苦勞している」と思わせておかねばならないのだ。姉の不幸こそが妹の幸福。だから実際の進捗状況は、隠し通す。

「とりあえず、午後はハルヴァアラ伯爵夫人とお会いして、現在の領地の状況を確認しますね。アルノシュト伯爵を引きずり下ろす話は、それはそれで進めたいと思っっているので」どこまで私の勉強が捗っているか……などと、イデオン公爵邸の外に悟られてはいけない。

口にはしなかったけど、視線で私の真意は伝わっただろう。

——すまない、とエドヴァルドの唇が微かに動いた気がした。

それはきつと、ハルヴァアラ領のことについての謝罪ではなかったはずだ。

第二章 脳筋侯爵と未亡人の事情

イデオン公爵領下において、当主である公爵に対し税収、納税を中心とした、領地に関する定例報告の義務を負っているのは十二人だと、セルヴァンからは聞いた。

村長は町長に、町長は男爵あるいは子爵に、男爵あるいは子爵は、伯爵あるいは侯爵へと報告を上げ、最終的には九人の伯爵と三人の侯爵が公爵へ報告を行っているそうだ。

ちなみにイデオン公爵領は、国に五人いる公爵の中で、持つ領土の広さとしては下から二番目ということになるらしい。ただ、イデオン公爵領は王都、三つの公爵領、王家直轄領、ギーレン国に面しているため、国内で最も戦略的な要衝であると言っってもよく、毎年の報告は、おぎなりにされるべきものではないのだという。

『蘇芳戦記』では説明文程度の話だったはずだけど、今のこの現実世界に当てはめて考えてみた時に、果たしてエドヴァルドは自らが治める地を捨ててギーレンに亡命することを潔しとするのだろうか。

そんなことをするくらいなら、黙って断頭台の露と消えることを、選択しそうな気が

して仕方がない。

それにゲーム上ではアルノシウト伯爵家だけだったとはいえ、他にレイフ殿下の派閥下に取り込まれた家は本当にないのか。

エドヴァルドは私が大学あるいは卒業後に目指していたことと近いだろうからと、報告に立ち会うことを勧めてくれたけれど、私としては亡命暗殺エンド回避のために、エドヴァルドの敵に回らない領主を見極める必要があるように思えた。

とはいえアルノシウト伯爵夫妻から受けた精神的なダメージがあまりに大きくて、あと九人も来るのか……と、一瞬遠い目になってしまふ。ただ、そうは言っても毎年、家計簿のようなものを家令が送ってくるだけの侯爵家があったり、隣の領地に報告を預けてしまう場合があったり、家族に不幸があつて延期を求めている場合があったり……と、毎年十二人きつちりとやってくることは、まずないらしい。

つまりは今回、やってくるのはあと数人ではないかというのが、セルヴァンの見立てだった。

「既に、少し時間をいただきたいという伯爵領なんかもありますしね」

「……なるほど」

全員と会えないかもしれないというのはちよつと残念だけれど、そうそうこちらの都合に合わせて物事は進まない。そこは仕方がないと思うよりほかはなかった。アルノシウト伯爵夫妻が挨拶もそこそこに邸宅を後にした後、エドヴァルドは最近すっかり昼食として定着したらしいサンドイッチ持参で王宮に出仕していった。

私はダイニングで一人食後の紅茶を飲みながら、セルヴァンに毎年の定例報告に関するあれやこれやを教えてもらう。

この後、午後の半ばにハルヴァラ伯爵領から定例報告の担当者が邸宅を訪れる予定だ。既に「書類を持参する」と先触れのあつたこの領地は、昨年領主が急な病で帰らぬ人となつたそう、今年はまだ六歳だという長男ミカ君と、長男の成人まで伯爵代理となるイリナ夫人、そして夫人の実父であるコヴァネン子爵が付き添いで来るとのことだった。

きちんとした先触れが行われたことよつて、個人的に評価は高い。

そしてハルヴァラ伯爵領はアルノシウト伯爵領と隣り合つた領地だ。私としては、表立つてでなくとも構わないので、アルノシウト伯爵家を横から牽制出来るような家であつてくれれば嬉しいのだけれど。

ただセルヴァンは、ハルヴァラ領に対して何か思うところがあるらしく、慎重に言葉を選びながらこちらを見やつた。

「レイナ様、少々問題と言いますか……領内では夫人が代理となられることへの不安、もしくは不安と称した後見争いが密かに起きているとの話がございます。もしかするとこの訪問、一筋縄ではいかないかもしれません」

「ええ……ささっと白磁の話をさせてほしいんだけどなあ……。や、でも、そのイリナ夫人？ がダメダメな感じだと、そもそも話も持ちかけられないし……そここのところどうなのかな……？」

「亡くなられたハルヴァアラ伯爵様は、穏やかで私欲をほとんど表に出さない方でした。毎年堅実な報告をなさっていらつしやいましたが……」

夫人までセットでやってきたアルノシュト伯爵家と違って、ハルヴァアラ伯爵夫人は王都まで来てても、エドヴァルドの屋敷にまで連れ立って押しかけてくることはなかったらしい。

「まだご長男お一人だけでしたから、娘を旦那様へ……とか、邪な発想を持ちようもなかったんでしょう。私もお会いしたことがございませんので、今年実際にどう出られるかまでは、こちらでも測りかねているのが実情でございます」

いやいや長男が六歳で、その後も娘が出来たとしても、その「邪な発想」はエドヴァルドがロリコンじゃなきゃ成り立たない。

想像しかけてすぐ、気のせいかわ物凄いか物凄いか冷気を感じて、一瞬身を振るさせた。

やめよう、うん、考えただけでも後が怖い。

ハルヴァアラ伯爵家に娘がいなくてよかったと思うことにしよう。

「あ……でもそれなら、夫人本人、なんて発想が出てくる……？」

「レイナ様？」

「ううん、なんでもない。いや、誰も当人を知らないなら、事前にあれこれ思い悩んでも仕方がないよね。本人を見てから判断するね」

「宜しくお願い致します。私もお傍に控えておりますので、何か気になる場合がございますましたら遠慮なくお申し付けください」

「ありがとうございます、宜しく。あ、この場合は私の方から声をかけてもいいのかな？」

「左様でございますね。レイナ様も夫人も、お互いに『代理』を名乗られる身。であれば、公爵家であるこちらに優先権があるということに宜しいかと。付き添いの方は、基本的にはこちらの会話に口を挟める立場ではございません。あくまで『付き添い』です。たとえ子爵様といえど、必要以上に遜る必要もないかと存じます」

それは、その子爵がアレコレ口出しをしてきても、取り合わずとも良いと言うことデスネ。

にこやかに微笑むセルヴァンから暗に示された言葉を、私は正確に理解した。かしこまりました、頑張ります。そうこうしているうちに、表門の方に馬車が到着したとの知らせが入り、私は玄関ホールの方へと移動をすることにした。

「む……？」

玄関ホールに入ってきたのは四人だ。

さっきまでのロリータ衣装に比べれば心が癒されんばかりの、ブラウンのAラインに長袖の上品なドレスがまず視界に入る。

あれがイリナ・ハルヴァア伯爵夫人なのだろう。彼女に手を引かれて歩いているのが、きつと長男のミカ君。母子共にミルクティー色のストレートな髪に天使の輪っかがリアルに見える。

なんて羨ましい髪質。

その後ろの生え際が寂しい小柄な男性がコヴァネン子爵で……あと一人は、護衛の青年といったところだろうか。

私を見て不審げに眉を擡めたコヴァネン子爵をあえて無視する形で、まず夫人の方に

微笑んでみせた。

「遠路ご苦労様でございました、ハルヴァア伯爵夫人。私、レイナ・ソガワと申しまして、当代の扉の守護者。マナ・ソガワの姉にございます。今は、エドヴァルド様からひとかたならぬご厚情を賜りまして、この邸宅において内向きのことを任せられ、二階の一室を頂戴しております」

すると私の言葉を聞いたイリナ・ハルヴァア伯爵夫人の瞳が揺れるのと同時に、背後に立つコヴァネン子爵の顔が、忌々しげに歪められた。

（おや）

オルセン侯爵と違って、私の言葉の意味は通じたみたいだ。

だけど同時に、ここに来るまで何かを企んでもいたことが分かる表情だった。主に、後ろの子爵様が。

「どうぞ団欒の間へご案内致しますわ。書類はそちらでお預かり致します」

「……ハッ、女が何を言うか」

そして表情のままの声が、玄関ホールに響き渡った。

——どうやらこちらの方は、残念なタイプのオジサンだったようです。

「はあ。と、私は聞こえるようにため息をこぼした。
 「本来でしたら、付き添いにすぎない方にこのようなことを申し上げる必要もございませんのですけれど……。私はエドヴァルド様から、不在の間の代理を務めるよう申しつけております。彼の方が『内向きを任せる』と仰ってくださいだったのは、そういう意味も含んでおりましてよ?」

せいぜい、聞こえるようなため息をついて「付き添いのオジサン」を見れば、想像通りにプライドを刺激されたらしく、顔を赤くして身体を震わせていた。

「なんだかハルヴァアラ伯爵夫人が、目を見開いて私を凝視してますけど……。口答えをしているの、それほど意外ですか?」

「なら、ダメ押しで。」

「私の国では、男女関係なく政治経済について学べる環境がございますから、定例報告の書類であれば、問題なく拝見させていただきますわ。恐らくはそういうところも、エドヴァルド様に厚遇いただいている一因ではと思っておりますけれど」

「この……。っ!」

そしてコヴァネン子爵の導火線は、想像以上に短かった。

前にいた娘と孫を突き飛ばすようにして、こちらへと突進してきたのだ。

「女は黙って男の言うことを聞いておればいいのだ! 生意気に公務に口なぞ出すでないわ! だいたい、子爵であるこのワシになんたる口の聞き様か! 礼儀も知らんと言

うなら、躰け直してやるわ!!」

「お父様!! おやめください……。っ」

「母上!?!」

ハルヴァアラ伯爵夫人が突き飛ばされるのを見たミカ君が悲鳴を上げる。

それにもかかわらずコヴァネン子爵は、おかまいなしに私の方に大股に近付いてきて、右手を大きく振り上げる。

「平手打ちでもするつもりだろうか。」

「けれどその手は予想した通りに、最後まで振り下ろされることはなかった。」

「……。この人、オルセン侯爵より小物かも」

「あのなあ、お嬢さん。今度からバカを挑発するなら、ひと声かけてくれるか。心臓に悪いわ。俺じゃなく、主にお館様の」

「きつとセルヴァンが取り押さえてくれるだろうと思っていたのに、子爵の右手を捻り上げていたのがファルコだったのは、ちょっと予想外だったけれど。」

あの……。どこから現れたの、今?」